

はるなつマン

1983.12

No. 51

連絡所: 津田尚美

編集人: 葛西よう子

女子教育から

「男女の自立をめざす青年教育」へ

宗 更月 (県立)

教育

いわゆる「女子教育」なる言葉が、ふたんに三数年使われています。それは従来の「性教育」でも「性教育」でもなく、「女子教育」ともいえる内容のもの。日本のみならず世界の潮流として女性の職場進出や社会参加の急増を背景に、女性の権利拡大が叫ばれ、男女の平等を基盤に、女の生き方が問われ、これこそ社会情勢の中で女子に対する教育を根本から直さねばならないとするもの。今の所、学校現場で取り組まれている「女子教育」はほとんど前者者なのです。いったい「性教育」と「女子教育」は、性教育のみにあらず、性非行の増加を阻止することが出るものだろうか。女だけに前線を守れ、と説教しても男に養われて男の庇護下で生きようとする女の状況が、妻のなり限り、女は男子に媚をへつらう、性的衝動が男にある証しである。あるいは、逆、男の心を導くために、性行為迄至るだろうし、逆に男の心を導くために自ら進んで性的排斥を試みようと。男と女が対等な立場で互いの人格や権利を認め合い、尊重し合うという関係を築くことこそが本来、男と女の大切な愛のコミュニケーションである。性」を遊ぶ道具や武器にさせない、唯一の方法があると私は考えます。

性教育も同様です。一般的通念の女子は、セクシュアルに押しつけることで現代社会に対応出来るだろうか。未来社会に生きる女子達に必要なのは「女子」の生き方ではなく、人間としての生き方を教えること。私は思います。したがって「女子教育」とは現実の女性差別や男女観をふまえた上で、女子が一人の独立した人間として自由意志と自分力で



